研究課題	中世楽書の仏教伝承及び伝本研究
研究代表者	由井恭子 (教育開発推進センター　任期制専任講師)

１．研究目的

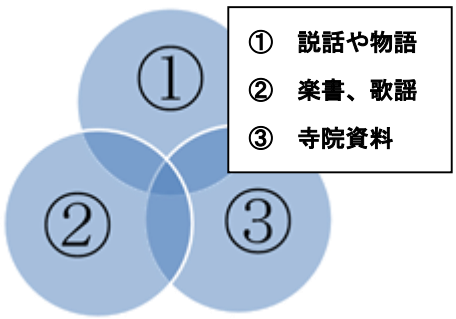
申請者は、『平家物語』芸能説話研究について、10 年余り研究を重ね、そのなかに、「楽書」や仏教歌謡からの引用が散見されることに気づいた。「楽書」や仏教歌謡は、独自の仏教伝承を含み、物語の世界に影響を与えている。つまり、「楽書」や仏教歌謡は、芸能だけではなく、文学、仏教に関する重要な資料である。

現在、楽書研究と仏教歌謡研究は僅少でこれから研究が求められる分野である。本研究は、中世楽書と仏教歌謡の仏教伝承を分析し、その特徴を考察する。それにより、文学、芸能、仏教の分野において新たな発見が得られる可能性があると考えられる。

また、中世における楽書で著名なものは、右図に示した『教訓抄』『続教訓抄』『体源抄』である。平成 29 年度は『続教訓抄』の分析に着手する。

①研究の学術的背景

１. 中世芸能研究の現状



中世文学における芸能研究は、右図のように大きく３分野に分けられる。①説話や物語、②楽書、歌謡③寺院資料である。

近年、中世芸能に関する研究は、特に①③分野で多角的にかつ急速に進められている。具体的には、二松学舎大学磯水絵氏による中世芸能説話に関する研究(①)、申請者による『平家物語』における芸能説話研究(①)、名古屋大学阿部泰郎氏による数々の寺院調査と報告(③)、山田昭全氏、清水宥聖氏による貞慶講式集の研究(③)、金沢文庫による東大寺僧弁暁草の願文の出版(③)などがあげられる。このように①③の芸能説話、寺院資料の研究は進められ、寺院儀礼の実状や説話生成の方法など明らかにされてきている。

②の楽書、歌謡については、磯水絵氏や中世歌謡研究会により、調査が進められているが、まだその全貌は明らかにされていない。『教訓抄』『続教訓抄』などの楽書は、楽人自らが筆をとり、その奥義を子孫のために詳細に記した一級資料である。その楽書を分析することにより、文学研究、仏教学研究がさらに深まると考えられる。また、仏教歌謡はまさに歌われていたものであり、文学、仏教を考察するうえで資料的価値は高いと考えられる。

２. 応募者のこれまでの研究成果を踏まえ、着想にいたった経緯

申請者は、約 10 年にわたり『平家物語』芸能説話を研究テーマとし、論文を発表してきた。たとえば、2016 年『平家物語』竹生島詣考、2010 年「延慶本平家物語」経盛音楽説話について、

2009 年「延慶本平家物語」建春門院と胡飲酒の舞についての一考察、2007 年『平家物語』における以仁王ー蝉折・小枝説話についてー、2000 年『平家物語』千手前についてー管絃講との関わりからー、などにおいて、『平家物語』の芸能場面を分析し、発表してきた。

申請者は、これらの研究調査に携わった際に、楽書と仏教歌謡にふれる機会を得、楽書にはさまざまな仏教関連記事が、歌謡にはその当時の仏教思想が残されていることに気づいた。たとえば『教訓抄』には、弥勒菩薩の都率天で奏でられる音楽を「万秋楽」とする伝承がある。また法会で奏でられる音楽の詳細や、演奏担当者などが述べられていることもある。楽人は、宮中や寺社に仕え、それぞれの行事で演奏を任されていた。そこには当然仏教歌謡が歌われる場があった。楽書や中世歌謡に残されている資料を分析することにより、その周縁学問である文学、仏教にも新たな考察が加わると予想され、本研究は学術的価値の高い研究であると考えられる。

ただし、楽書についてはまだ、活字テキストに問題がある状態である。たとえば、『続教訓抄』の活字本は、昭和 14 年刊行の『日本古典文学全集』しかないため、翻刻や本文が疑わしい箇所が多い。『続教訓抄』伝本調査、整理も本研究の課題となろう。また、中世に大流行した『浄業和讃』の検討考察も加えていく。『浄業和讃』は平安時代に成立した極楽六時讃と同内容と考えられている。中古、中世にわたりもっとも人々に親しまれた和讃と考えられるため、研究に取り入れる。

②研究期間に何をどこまで明らかにしようとするのか。

１. 本研究の目指す到達点

第一の到達点は、楽書『続教訓抄』『体源鈔』の伝本収集である。

第二の到達点は、『続教訓抄』『体源鈔』仏教伝承の精査をすることである。

第三の到達点は、『浄業和讃』の伝本調査、歌われた時期、場所の調査である。

２. 到達に対するアプローチ

『続教訓抄』伝本は、京都大学、東北大学、宮内庁書陵部に依頼し、調査を実施する。『体源鈔』伝本は、京都大学、東北大学、国立国会図書館に依頼し、調査を実施する。

『続教訓抄』『体源鈔』仏教伝承の精査は、まず活字本で実施し、写本や刊本が揃った段階で、比較検討する。

『浄業和讃』伝本は、大正大学図書館、大谷大学、龍谷大学に依頼し、調査を実施する。『浄業和讃』についての調査は、和讃史の研究書や、時宗関連の研究書によって、知識を深める。

③当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

学術的な特色

楽書、仏教歌謡に関する研究はまだ浅く、今後、本文研究などを含む、多角的な研究が求められる分野である。現在、楽書研究の多くは、文学との関わりから考察されており、楽書そのものの研究は立ち遅れている。仏教歌謡研究については、ほとんど研究がなされていない状況といえる。

本研究の学術的な特色としては、『続教訓抄』や『浄業和讃』の伝本整理があげられよう。これらは、現在よい活字本がないため、研究が遅れていると考えられる。本研究により、研究者が本

文で悩む必要がなくなれば、さらに研究が発展するであろう。

独創的な点

楽書には、多くの仏教伝承が残されているが、研究としては遅れている分野である。したがって、それらの伝承を分析することにより、楽人が伝承していた仏教芸能、伝承の一端を発見することができるであろう。また、楽書を書いた楽人は和讃を含め、仏教行事の演奏に携わった可能性も高い。二つの関連部門を多角的に分析する点も独創的であるといえる。

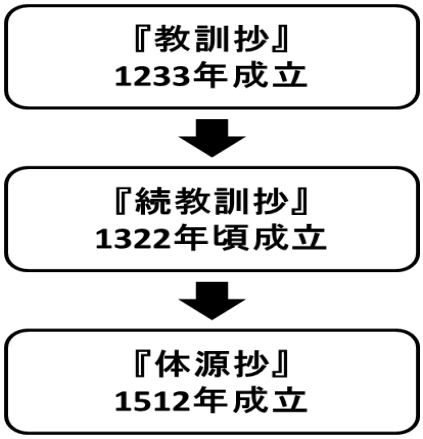
２．研究方法

申請者は、『平家物語』芸能説話研究に関する研究を 10 年あまりにわたり、実施してきた。これらの研究に携わり、数多くの楽書調査、芸能記録調査を実施する機会に恵まれた。

本研究は、申請者のこれまでの研究を背景として、それを発展させるものである。

1） 中世には、『教訓抄』『続教訓抄』『体源鈔』の三つの楽書が誕生した。本研究では、まだ、伝本系統が明らかにされていない『続教訓抄』『体源鈔』の伝本調査を実施する。特に、『続教訓抄』の活字本は、昭和 14 年に刊行された『日本古典全集』のみであり、その翻刻は疑わしい箇所が多い。伝本調査実施後は、その本文校訂にも着手していく。

2）中世に大流行した仏教歌謡の基礎研究を実施する。たとえば『浄業和讃』は平安時代に成立し、『栄華物語』や『梁塵秘抄』など文学作品に引用されてきた。また、中世近世において、版木が摩滅するほど何度も刊本刊行がなされたにもかかわらず、その現代語訳も出されておらず、出典研究も進んでいるとはいえない状況である。本研究では、仏教歌謡(『浄業和讃』)の基礎的研究である、伝本調査、出典調査、歌謡の歌われた時期や歌詞の変遷調査などを実施する。また以下に掲げる３の研究とも連関させ、寺院での芸能の一端を明らかにしたい。



3)『続教訓抄』『体源鈔』に見られる仏教伝承の精査を実施する。まずは活字本で場面をとりあげ考察し、写本や刊本が収集できたら、それを比較検討する。

３．研究成果と公表

『続教訓抄』伝本調査については、京都大学本、東北大学本、宮内庁書陵部本を調査し複写を許可された。昭和 14 年に刊行された日本古典全集本は、誤写か、誤読か不明であるが、読解できない部分を残している。いっぽう、京都大学本、東北大学本は状態も良く、活字本と比較し、難読部分を解明できる可能性が高いといえる。『体源鈔』伝本調査については、京都大学本、東北大学本、国会図書館本を調査し、複写を許可された。『体源鈔』についても、どのテキ

ストも状態がよく、活字本との比較検討が可能であることが分かった。

『体源鈔』の仏教伝承を精査していく過程で、興福寺の常楽会についての記述が多く残されていることが分かってきた。興福寺常楽会は、中世に絶大な権勢を誇っていた興福寺のなかでも、最も華やかな舞楽法要として人々に認識されていた。当然楽人にとっても、重要な儀式であった。歴史書や文学作品にはあまり触れられない、興福寺常楽会の音楽や舞楽の次第については、『体源鈔』にはかなり詳細に記録が残っていた。また、足利義満が興福寺常楽会を訪問した際には、すでに法要の全盛期はすぎていたようであり、義満の来訪を機会に復興したことが分かってきた。これらの調査結果は「興福寺常楽会考―楽書『體源鈔』を中心に―」として『国文学踏査』第 30 号に投稿した。

さらに『体源鈔』紐解いていくと、『体源鈔』著者豊原統秋が自身の信仰と、楽家の演奏者としてどのように折り合いをつけているのかが記されていることが明らかになってきた。豊原統秋は熱烈な日蓮宗の信者であった。とくに、阿弥陀信仰には懐疑的で、強烈に批判している箇所も見受けられる。しかし、笙家一の者として、さまざまな場面での演奏を求められる立場であった。当然、日蓮宗以外の法要にも呼ばれたはずである。そのような場面では、『法華経』を典拠とし、己の立場の正当性を訴えていることが分かった。たとえば、弥勒信仰と関係が深いとされる「万秋楽」の曲については、『教訓抄』などの伝承を踏まえつつ、『法華経』のなかの弥勒信仰を追記し、自身の立場を明らかにしている。これらの調査結果は「『體源鈔』における万秋楽　―豊原統秋の法華信仰との関わりから―」として、『佛教文化学会』第 27 号に投稿した。

『浄業和讃』については、大正大学図書館本を複写し、龍谷大学本、大谷大学本と比較した。同じ版木であるが、奥付など異なる部分があることが判明した。さらに大正大学図書館蔵本『浄土和讃』を複写することができた。中世和讃の貴重な資料と考えられるが、まだ研究が進んでいない分野である。他の和讃との関連を含め、今後考察していく予定である。